

巻頭言



駒場野

東京大学大学院経済学研究科 教授
—— 吉川 洋*

40 年前の思い出である。東京オリンピックが開催された 1964 年、私は東京教育大学付属駒場中学校に入学した。以後高校を卒業するまでの 6 年間この学校に学んだ。現在は筑波大学付属駒場と改称されている同校は 1 学年中学 80 人、高校 160 人という小さな男子校だが、いわゆる受験校の 1 つとして世間では知られていると思う。しかしわが母校が実は農業と切っても切れない縁にある学校であるということは知られていない。

現在「筑駒」とよばれている学校は戦後の混乱がまだ続く昭和 22 年 5 月 1 日に開校した。この時の校名は東京農業教育専門学校付属中学校（高校はまだ無し）。この事は今の在校生、最近の卒業生はもう知らないだろう。開校時に入学した中学 1 年生が高校に入学する時をむかえた昭和 25 年 4 月に付属高校が誕生した。1 学年 2 クラス、1 つが普通課程、もう 1 つは農業課程というクラス編成であった。その後昭和 27 年に東京農業教育専門学校が閉校されたのに伴い、2 年前に発足していた東京教育大学農学部付属する形で教育大学付属駒場中・高等学校という校名に改称された。校名が変わっても高校における農業科は 10 年以上存続し、最後の農業科卒業生が卒業したのはオリンピックの年、つまり私が中学に入学した年の 3 月である。

今や知る人も少なくなったが、駒場はわが国における近代的農学発祥の地である。明治初年からの歴史を『筑駒 50 年史』『東大 100 年史』によって簡単に振り返ってみることにしたい。「近代的」つまり西洋流の農学の研究・教育機関の嚆矢は 1874（明治 7）年に開かれた内務省農事修学場のようだ。場所はなんと現在の新宿御苑。同校は 3 年後 1877（明治 10）年に農学校と改称され駒場の地に移った。これが駒場と農学の出会いである。ちなみに様々な教育・研究機関を統合して東京大学（まだ帝国大学ではない）が本郷の地に創設されたのも同じ明治 10 年 4 月だが、この時点では農学校は内務省の所管であり東大とは関係が無い。

1881（明治 14）年農学校は農商務省に移管、翌年には駒場農学校と改称され、さらに東京農林学校を経て 1890（明治 23）年、4 年前に東京大学が改称されて誕生した帝国大学（京都に大学はまだ出来ていなかったの「東京」は付かない）の「農科大学」となった。農科大学の敷地は広大で、現在の東大教養学部を中心に西は小田急線の東北沢駅近くまで、南は井の頭線を挟んで駒場野公園、大学入試センターとなっている地所を経て淡島

*当研究所参与

通りまで及んだ。

農科大学はその後東京帝国大学農学部と改称され 1937（昭和 12）年まで駒場の地にあった。この年一高と東大農学部は敷地交換を行い、一高が駒場へ、農学部が本郷向丘へ移転したのである。こうして駒場と農学の縁は薄くなった。しかし両者の縁は完全に切れたわけではない。話は前後するが農科大学には農業教員養成所という付属学校が設けられていた（1899 年開校）。この学校は東大農学部が本郷に移転した時に東大から独立し東京農業専門学校と改称した上で駒場に残った。はじめに述べたようにわが母校教駒、現在の筑駒は、この学校の付属学校として戦争直後に産声を上げたのである。

これでお分りいただけたと思う。私が 6 年間学んだ学校は本当に農業と縁深い学校なのである。もちろん私たちは正式の農学を学んだわけではない。しかし学校には農業との繋がりが色濃く残っていた（今でも残っている）。たとえば校長は 6 年の任期で教育大学農学部の教授が務められていた。毎週一回全校生徒を対象にした 15 分程度の「校長訓話」があったが、農学部の先生なので当然「自然」「農業」をテーマにした話が多かったように思う。また当時中学・高校には家庭科・技術（？）といった名前の授業があったが、そこでわれわれが教わったのは「農業」である。先生はもちろん農業教育専門学校付属時代からの農業の専門家、その先生に農業を教わる場は「ケルネル田圃」と呼ばれるたんぼだった。

井の頭線が吉祥寺方面に向かって駒場東大前の駅を発車するとすぐ左手線路沿いに小さな田圃が見える。これが「ケルネル田圃」である。小さなたんぼで見た人は今どきなんてこんな所にたんぼがあるのだらうと思うに違いない。実はこのたんぼは 1878（明治 11）年、前の年に駒場に創立された農学校によってつくられたわが国最初の試験田・実習田なのである。当時正式には「駒場農学校本邦農場水田」と呼んでいたらしい。明治 11 年には天皇の行幸を仰いだ。今では駒場小学校の片隅ソバ屋の裏手にありよく見えないのだが立派な行幸碑まで建っている。ちなみにオスカー・ケルネルは 1880（明治 13）年に来日し農学校で教えた「お雇い外国人教師」（肥料など分析化学の専門家）である。

130 年近くケルネル田圃は先に述べた様々な名称の学校の関係者により維持され稲作が続けられてきた。そして 1947 年東京農業教育専門学校付属中学が開校されて以来現在に至るまでおおよそ 60 年間この水田は教駒・筑駒によって耕されてきた。田植えから刈取りまで先生の指導の下に稲作が生徒の手によって行われてきたのである。私たちが教えて戴いた先生は先にも述べたとおり農業付属時代からの先生で農業に対して一際強い情熱を持っておられた。十代の少年達にも先生の農業への「熱い思い」は伝わってきた。

「ケルネル田圃」は明治開国という激動の時代において日本農業の「構造改革」を象徴するものであったと言っても良いであろう。農業は自然との対話であるからそこには何百年、何千年変わりえないものもあるに違いない。しかし農業といえども時代の流れの中で変わってきた。日本の農業は今日大きな曲がり角を迎えている。そこに論争が生まれることは当然とも言えるだろう。こうした時こそ駒場野に集った明治の先人達の開拓者魂を思い出したいものである。